

平成29年度創価大学教職大学院連絡会総会
連絡会ワークショップ報告

書く力の育成を中心に据えた小学校の授業づくり

墨田区立隅田小学校
西 中 克 之

1 書く力は<広く楽しい関わりや学びの世界>の扉を開く

小学校の学習過程において、「書くこと」は、国語科における一つの領域として位置付けられているが、実際には児童の学習活動全体に関わる大きな領域である。文部科学省では、言語能力を「話し言葉」「書き言葉」に大別して審議し、言語能力を①知識・技能、②思考力・判断力・表現力、③学びに向かう力・人間性等の三つの柱を立て、それぞれに必要な力を明記している。その中で「新たな知識の習得は基本的に言葉を通じてなされている」ことや、「既存の知識と関連付けながら自分の考えを構築したり、目的に応じて表現したりすること」は「言葉が重要な役割を果たしている」と明記している¹。

翻って、自らの経験を振り返ってみると、小学校入学当初の児童の多くは多弁で、自分の思ったことを素直に話すように見える。しかし、書くことに関しては幼児教育での体験の差こそあるものの、多くの児童は未体験と言ってよい。書くことは、次々に浮かぶ言葉を整理して、話の前後関係を知らない読み手にも伝わるように表現しなくてはならない、入学期の児童にとっては一段階高度な言語活動であると考ええる。

小学校では、国語科に限らず書く活動を取り入れた授業が大半を占める。しかし、書くことに関して抵抗感をもっている児童は少なくない。筆者の経験上、書くことに対して苦手意識をもっている児童に対して言葉をかけると、「書きたいことがない」「考えなんてない」と返答されることが多くあった。そのような児童は、自分の感情を言葉にすることが苦手で、友達とのコミュニケーションが上手いかずにトラブルを起こしたり、巻き込まれたりするケースが少なくない。

一方で、筆者が担任をした児童の中で、書く活動を充実していくことで、話したり聞いたりすることがスムーズにできるようになった場面を見てきた。小さな成功体験を繰り返すことで、文章を書くことに抵抗感をなくしたり、徐々に自分の考えや感情を言葉に表すことができるようになったりした児童もいる。そのような児童は、友達

とのトラブルも大幅に減った。こうした事例をいくつも目の当たりにし、書く力を身につけることは、言語能力を磨くことにつながり、児童を＜狭く感情の渦巻く世界＞から、＜広く楽しい関わりや学びの世界＞にいざなう道筋になると考えるようになった。

2 児童が自ら「書いてみたい」と思う仕掛けを

小学校入学期の児童は、話し言葉から言語を習得する。その中には、日常会話のやり取りや、絵本等の読み聞かせの言葉も含まれる。小学校に入学してから本格的に本に書かれている書き言葉に触れたり、自ら文章を書いたりする。このような過程を鑑みると、話し言葉を基本にした文章作りが適していると言えるだろう。書く力を育成する前段階として、児童が話した内容を教師が板書するなど例示を多く行うことで、書くことのルールを一つずつ身に付けさせることが求められる。

児童が自由に表現するための知識や技能を身に付けることと並行して、書くことへの抵抗感を減らし、自ら書いてみたいと思わせるような意欲を一人一人の児童がもてるようにしたい。そのためには、書く力の育成を中心に据えた授業の仕掛けが必要となる。児童が主体的に書く活動に取り組めるように、児童が個人で書く活動だけではなく、ペアやグループなどの少人数の単位で交流する場面を設定した実践を行ってきた。いくつかの実践は、児童が自ら書いたことを発表したり、友達が書いたことを聞いたりすることで、児童個人の考えが広がったり深まったりすることをねらっている。本稿では、筆者がこれまで実践した事例をいくつか挙げながら、「書く力の育成を中心に据えた授業づくり」についての考えをまとめていく。

3 書く力を伸ばす授業の実践

(1) アクロスティックを使った自己紹介ワーク

アクロスティックとは、別の意味になる言葉を織り込む言葉遊びの一種である。多くの場合は、文頭を揃えて繋げることで別の意味を作る「あいうえお作文」として親しまれている。これは、新聞のテレビ欄でも時に使われる技法でもある。言葉遊びの中で、児童にとって比較的理解がしやすく、取り組みやすいことから、書くための意欲付けとして授業に導入する機会が多い²。

今回は小学校中学年以上で学級開きをする際に、自己紹介をすることを想定してワークを作成した。手順は以下の通りである。

- ① 縦書きの原稿用紙やノートなどの行頭に横書きで名前を書く。
- ② 行頭の文字に合わせて自分を表現する文を書く。
- ③ 自己紹介の文章ができたら、ペアを組む。

- ④ 話し手は、自己紹介の文章をペアに紹介する。
- ⑤ 聞き手は、話し手の作品の良いところを見つけてコメントする。
- ⑥ 話し手と聞き手の役割を入れ替える。
- ⑦ ペアでの対話を終えたら、全体にいくつかのペアの紹介をする。
- ⑧ 活動が終わった後、作品は学級の掲示物として全体に共有する。

このワークを行う前に、教師が自らの自己紹介を行って例示を行うと、児童はより積極的に取り組むことができる。それぞれの児童の作品が個性的で語彙に富んだものである場合は、教師が学級全体に紹介すると、文章をより良いものにしようという意識付けにもつながる。取り組みやすい上に、教師が児童の書く力を見取ることもできるので、書く力を伸ばす第一歩として適したワークとも言える。

(2) 歴史人物と仲良くなろう ～吹き出しを使った会話文づくり～

小学校6年生の社会科では歴史単元を扱う。学習指導要領では、「我が国の歴史上の主な事象について、人物の働きや代表的な文化遺産を中心に」理解と関心を深めるようにすると明記されている。加えて、人物の働きについては、「歴史上の人物が当時の世の中の課題を解決し、人々の願いを実現して行ったことを調べたり、調べたことをまとめたりしながら、人物の働きを共感的に理解できるようにすること」と記述されている³。小学校の歴史学習は人物中心であり、人物の働きを通して歴史的事象を扱うことが求められている。

筆者は人物に関して共感的に理解できるようにするため、吹き出しを用いたまとめづくりを授業の後半に毎回行っている。登場する人物の功績を人物に成り切って紹介するためには、児童がそれまでの学習内容を振り返り、情報を整理する必要がある。インプットした内容を児童なりに解釈し、歴史人物のセリフとしてアウトプットすることは、人物の立場から歴史的事象を捉えるためにも有効である。

様々な人物を扱う中で、本稿の事例として挙げるのは、紫式部と清少納言である。両者は直接の関わりはほとんどないが、女房として仕える身としても、女流作家としてもライバル関係にあったと言われている⁴。このような関係性を利用して、紫式部と清少納言それぞれが自らの自慢を行うという設定で、セリフづくりを行った。児童はペアを組み、紫式部、清少納言のいずれかを分担する。片方の人物に肩入れし、ペアの友達と「自慢合戦」をすることで、より意欲をもって取り組むことができると考えた。

参考とする資料として教科書の副教材として用いられる事多い社会科資料集⁵を用いた。加えて資料から読み取ったことをセリフにまとめやすいように以下の文型を設定した。

- ①私は、〇〇です。(紫式部か清少納言のいずれかが入る)
- ②確かに、〇〇さんは・・・です。(分担になっていない人物の業績を讃える)
- ③しかし、私は・・・が優れています。(分担になっている人物の業績を相手に負

けないようにアピールする)

書き終わったら、友達と交互に自慢合戦を行い、授業の最後にわかったことを振り返りとして記述する。このとき気をつけたいことが、勝敗ではなく、友達の自慢の仕方に目を向けて、記述の仕方などセリフの書きぶりに対して自己評価をさせることである。次回に向けてどのようなセリフを書きたいかを振り返りに記述させれば、次時に向けて自ら目標を掲げることもできる。歴史の学習を通して、書く力や学習意欲を高めることにも寄与すると考える。

(3) 随筆を書こう ～オリジナル枕草子づくり～

清少納言の枕草子は、優れた随筆として千年以上経った今でも読み継がれている。古典について親しみをもつとともに、清少納言の見方や記述の仕方について考える機会として教科書で扱われている⁶。ここでは、「春はあけぼの」の段を読んで作品のもつリズムに親しむとともに、「春はあけぼの」の段に記述されている文章の型を用いてオリジナルの随筆を書く活動を設定した。進め方は以下の通りである。

- ① 枕草子「春はあけぼの」の段（原文と現代語訳）を読む。
- ② 清少納言がどのような見方で季節を捉えているか考え、話し合う。
- ③ 「をかし」（趣深い）「わろし」（良くない）二つの言葉の意味を理解する。
- ④ 児童は個人で随筆に書きたい季節と、象徴となる出来事やものを想起する。
- ⑤ 「○○（季節）は・・・。」という書き出しと、「をかし」「わろし」のどちらか一つを用いて、随筆を書く。

⑥できた作品を四人グループで読み合い、コメントカードを交換する。

⑥のコメントカードには、友達の見方や考え方の良さに注目して記述するよう促す。これによって、自らの視点だけではなく、自分にはなかった友達の視点を意識して自らに取り入れようとする構えをつくることができる。交流する活動は、自らの作品を口頭で紹介するだけでなく、コメントを交換することでも成立する。コメントを書くためには、相手を意識しなくてはならないので、話し言葉とは違った緊張感が生まれ、表現を工夫しようという態度も生まれる。また、「をかし」「わろし」といった古語を入れることで、古典に親しむ態度を養うこともできると考えた。

高学年の段階では、自らの作品を仕上げるという一つの活動だけではなく、交流活動によって表現や内容を見る視野を広げることで、自らの学びについても省みることができるよう学習場面を設定していきたい。また、友達にコメントカードを書く活動では、目的や相手に応じて書く力を養うことにもつながると考える。

4 終わりに

言葉をもつことは、自分と他者とをつなぐ架け橋をもつことだと考える。言葉によってモヤモヤしたイメージを、自分にも相手にもわかるように整えることができる。イメージと合致した言葉を紡ぐことができるようになると、言葉を介して自らの思いを伝えることができる。思いが伝えられるから、相手の思いに立つことができる。言語能力の育成は、人間が生きていく上で欠かせない重要なファクターだと考える。

書くことは、頭に浮かぶ無数の言葉を一度自分から手放して、表現を再構成する作業であると考え。児童が書くことによって、自らの考えを整理し、広め深めていく過程を、教科に関わらず行っていくことが、児童の学びをより実りあるものにするものだという考えのもと、今後も実践を積み重ねていきたい。

注

- 1「言語能力の向上に関する特別チームにおける審議の取りまとめ」文部科学省 平成28年5月
- 2『書く力を伸ばす実践ワーク & 指導法』西中克之・大西城司 ナツメ社 2017年 P95 より抜粋
- 3「学習指導要領解説 社会編」第6学年内容(1) 文部科学省 平成20年
- 4『紫式部日記 現代語訳付き』角川ソフィア文庫 山本敦子翻訳 2010年 日記の中に、「清少納言こそいたり顔にいみじう侍りける人（清少納言は得意顔でとても偉そうにしている）」という記述がある。
- 5『6年社会科資料集 平成29年度版』青葉出版 2017年
- 6『ひろがる言葉 小学6年上』教育出版 2016年